

WILD RUSH

恐竜墓場～

今月のWILD RUSHはホネ特集 / 前ページの松村作・闘争化石の他、山崎繁の新作造形などなど、併せて紹介してしまうのだ。



▲ティラノサウルスの口の中には、トリケラのフリルの破片が残っているぞ。ちょっと全体的に骨を土に埋めすぎたかな?とも思っています



◀「何か作り起しをひとつ」と思い、ティラノにつぶされた原始人(?)の頭蓋骨を作りました。恥骨の下にいます。わかるかな—?

◀地面の丘のほうから見てみました。小物はドールハウスのものなどを使用。ツルハシはティラノのTボーンより削り出したのだ

山崎 繁 SHIGERU YAMAZAKI

どうも山崎です。全身骨格パート3のヴェロキラプトル・モンゴリエンシスがなんとか出来上がりましたので紹介いたします。

このヴェロキラプトル(以下ラプトル)という恐竜は、昨年の映画『ジュラシック・パーク』にも登場しました小型肉食恐竜の一種です。従来の恐竜像で「コワイやつ」といえば十中八九は、ティラノなどの“大型肉食のやつら”というのが当然のイメージでしょう。ところが『J・P』ではそのティラノを我々の期待通りの最高の特撮で表現する一方、それまで一般的には認知度ゼロだった小型肉食恐竜の「コワさ」をいきなり最高のテンションで見せつけてくれました。それがまた見事に、生まれる歩く走る跳ぶ転ぶ喰う喰われるというふうな、単純だけど知恵もあるバイオレンス野郎、というナイスなキャラクターで



アルシノイテリウム頭骨 [Arsinoitherium]

▲アルシノイテリウムは約3500万年前のエジプトに生息した哺乳類。体躯は大型のサイぐらい。先祖も、その子孫もはっきりしないナゾに包まれた動物だ。この作品は約20cmの頭骨で、近日中にキャストキットとなる予定

ヴェロキラプトル [Velociraptor]

▼これは「恐竜倶楽部」の広末吉彦くんが作ったラプトルの骨格モデル。G・ボールの骨格図がモチーフで、スケールは1/20。よって小さい。でもカッコイイ



表現されきっていたのです（なんか遅れてきた『J・P』評みたいではないです）。

映画もそんな恐竜や優しい恐竜の、最新テクニックによる表現のぶっ通し。よくこの映画にはドラマがないとか、ストーリーがないという声を耳にしましたが、そもそも動物園で人間ドラマを見たなどというのがワカランチンのタッチメチンなのであり、「シネフェックス」のキーワードになっていた「野獣の美」という言葉が、この映画の存在理由をすべて言い表していると思います。

キットの方は当初ワンパーツ頭骨シリーズとして作っていたのですが、このサイズで全身あれば手頃でいいんじゃないかと考えて、そのまま全身作りしました。実は全身骨格第3弾はエラスモサウルスにするつもりで、例によって芸大の伊藤恵夫さん（真の骨格プロフ

ェショナル、一年戦争では赤い彗星と呼ばれた）に資料をいただいており、それを眺めて「むう…」とか言っていたのに、一転ラブトルに変更となった次第です。本当に伊藤さん、これまでも今回もこれからも、どうもありがとうございます。なぜかこのコーナーに突然載っているビッグサイズ頭骨シリーズ（←今名付けた）のアルシノイテリウムとかをフェイントっぽく作りながらも、エラスモは4番目の骨格模型として着実に私の頭の中でスカulptされております。

ところで最近、本誌別冊のM.M.M.②を読んで、金子辰也さんの「ひまわり」を初めて見つけてしまいました。いくら近年ミラタリーものから遠のいているとはいえ、ずっと前から卓上ジオラマ作家としてもっとも影響を受け、作品を見れば必ずそこにあるジオラマゴ

コロに胸躍らされてきた金子氏の新作を、危うく見逃すところでした（一読者および一出入り業者として実にメンボクないことです）。金子氏の場合、どんな絵を見せたいのかか「実に明解で、死んだ空間がなく、カラーバランスがあり、有・無機物のバランスがよく、「ベースに地面とモノを置いただけのジオラマ」みたいなのは比較にならない狙いのスルドさがあります。僕の人生の目標は日々ホネなどでしのごつつ、氏のような完成度の高いジオラマを作り続けていくことなので、今回の「ひまわり」で久しぶりにそのスタンスを確認できました。金子さん、これからもこんなグレートな作品を見せ続けて下さいお願いします。それではみなさん、また。



●映画「J・P」で一躍有名になったのが恐竜類。トリケラトプスに続く全身骨格モデルの最新作だ。いかにも鋭利そうな体形、鋭利のカギ爪、鋭く伸ばされた尾等、特徴を完璧再現。感動があらわれるボースモナイス！

Velociraptor mongoliensis

ヴェロキラプトル・スケルトン